

## I 「オセロ」 (シェイクスピア 英) 1602年

岩波文庫 菅 泰男 訳

## [第1幕]

イヤーゴとロデリーゴはオセロを憎んでいた。イヤーゴはオセロが自分の代わりにキャシオを副官に昇格させたから\*①、また、のろまのロデリーゴが自分の惚れているデズデモーナをオセロが横取りしたからだ。一方、デズデモーナの父親でヴェニス議員をしているブラバンシオも、自分の娘の結婚相手としてはオセロのことを納得してはいない\*②。そこで、イヤーゴとロデリーゴはブラバンシオをたきつけて、彼をしてオセロと剣を交えさせようと画策した。しかし、折しもトルコ艦隊がサイプラス島に侵攻してきたので、ブラバンシオほかヴェニス議員は、オセロを査問しているどころではなく、オセロもサイプラスへ、デズデモーナとともに赴任した。

\*① イヤーゴは、オセロが自分を副官にしなかったことをうらみ、のろまのロデリーゴを相手に愚痴を並べ、忠義の面なんかやってくれるかと言いつつ。

\*② ブラバンシオは、娘デズデモーナをオセロが誘拐したと非難する。オセロはブラバンシオに弁明をし、また、イヤーゴとロデリーゴに向かって、「剣をおさめよ、夜露で錆びてしまうぞ」

## [第2幕]

やがてオセロが島に赴任してから、トルコ艦隊は大嵐で壊滅し、島は勝利と二人の結婚の祝賀ムードとなった。イヤーゴは、まずデズデモーナを思いっきり褒めた。\*① しかしその一方で、イヤーゴは遠回りながら確実な手順をふんで、オセロを陥れようとした。——イヤーゴは、酒に弱いキャシオに祝い酒をむりやり飲ませ、のろまのロデリーゴをしてキャシオに喧嘩を売らせるが\*②、この混乱の中、キャシオは自分を制止しようとしたモンターノ(オセロの前任者)に向かって斬りつける。この騒ぎでキャシオは、オセロから免官された。

## [名セリフ]

\*① イヤーゴはデズデモーナに、以下の褒め言葉を投げます——  
「美人であってもえらそうにせず」  
「言葉がたくみでも決しておしゃべりでなく」  
「お金に困らなくても決して派手にならず」

\*② 「ロデリーゴがキャシオを殴りつける→イヤーゴが騒ぎ大きくさせる→キャシオは免官→ロデリーゴは、デズデモーナをものにするができる」とのシナリオをイヤーゴはロデリーゴに示してやるこ

とで、ロデリーゴは、この企てに乗った。

ほぼ筋書どおりに進むが、ロデリーゴはデズデモーナをものにはできなかった。「ここまでついてきたけれど獵犬のように獲物をとることはできなかった。ただ吠えただけ」しかし、ロデリーゴは、イヤーゴの語る企てに乗ったことを後悔する。

## [第3幕]

イヤーゴはキャシオに、オセロの妻デズデモーナに取りなしを頼むようすすめ、キャシオはさっそくデズデモーナの情けにすがろうとしたが、その場面を、偶然通りかかったオセロが見た(これもイヤーゴの策)。イヤーゴは、自分こそオセロに忠誠をつくしている人間だと思わせるために、オセロを焚きつけてはなだめ、巧妙に① オセロをして妻への疑念を増幅させ、その裏事情を尋ねたい気にさせた\*②。

## [名セリフ]

\*①(イヤーゴ)「人は見てくれのとおりであるべきです」

(オセロ)「全くそうだ、人は見てくれどおりであらねばならない」

\*②(オセロ)「どうしても、お前の考えを聞くんた」

(イヤーゴ)「それはなりません。よしんばわたしの心があなたの手の中にあるといたしましても、私がそれを保管しておりますのですから、そうまいらぬでございましょう」とまあ、自分は決して僭越なことなどしい人間だと言わんばかりに謙虚に言った。「えっ、」と驚くオセロに念押しに、究極の親切心を語りつける。

(イヤーゴ)「閣下、嫉妬は恐ろしいですよ」

「嫉妬は緑色の目をした怪物で、人の心を餌食にしてもあそびます」

イヤーゴは、もともと嫉妬の炎を燃やしていたのは自分なのに、今はオセロを全く自分のマインドコントロールしていることに自信を持ち、不遜にもこの「嫉妬」がキャシオのそれであるようにすり替えることに成功した。あくる日、オセロが頭が痛いと言っていると、デズデモーナはかいがいしく彼を看病しようとして、持っていたハンカチ(実はオセロから以前贈られた大事な品)でオセロの頭を縛ってやろうとしますが、それはやや小さすぎた。オセロがそれを払ったので、ハンカチは床に落ちました。それを見ていたエミリアはそれを拾い上げた。そして、夫のイヤーゴにそれを渡した。それはイヤーゴがエミリアに以前、これを盗ってこいといわれていたもので、彼女も「気まぐれに使えばいいわ」といった程度でしか考えませんでした。イヤーゴはこれをオセロの部屋に落としておいて、

それをオセロに見つけさせるようと考えた。そこへオセロがやってきて、オセロは、自分の今の心に胸苦しさをおぼえていた。彼は自分がかつて大なる軍功をあげていたときのあの充足感※を思い出しながら、一方で嫉妬の炎に焼かれる今の自分が惨めだった。

※「さらば、いなく駿馬、鋭く高きラッパの音、心を湧かす陣太鼓、耳をつんざく軍笛、堂々の軍旗、名誉の戦のあらゆる**特性、誇り、光栄、はでやかさ!** ああ、不滅のジュピターのおどろしき雷にまごう雄たけびすさまじい致命の大砲よ、**お前ともおさらばだオセロの仕事はもう終わった!**

Farewell the neighing steed, and the shrill trump, The spirit-stirring drum, th' ear-piercing fife; The royal banner, and all **quality, pride, pomp,** and circumstance of glorious war! And O you mortal engines, whose rude throats Th' immortal Jove's dread clamors counterfeit, **Farewell! Othello's occupation's gone.** (3幕3場)

エドガー作曲の「威風堂々」(英題:pomp and circumstance=(誇りに満ち、華麗にして(輝かしい)戦果の雰囲気)はこれに由来する。

嫉妬に狂うオセロが、彼女が浮気をしている証拠が欲しいと言ったので、イヤーゴは、オセロに「わたしは今日、キャシオが(「イチゴの刺繍をした)ハンカチで鬚をふいてるのを見ました」と言った。同 p120 オセロは殺してやると身を震わせた。そしてイヤーゴに「きょうからお前が副官だ」、「いつまでもお仕えいたします」

デズデモナーは何も知らずにオセロのところへやってきてキャシオの復職を頼んだが、オセロは風邪をひいたようでハンカチを出せと要求した。しかし、ここでデズデモナーはそれを持っていなかった。しばらく、「出せ」と「持っていません」の押し問答が続いたあと、オセロは興奮して去っていった。デズデモナーとエミリアはオセロの怒る理由が分らず怪訝な顔をしているところへ、キャシオがやってきて、繰り返し自分の職のことを頼んでいった。そのあとキャシオの前の愛人のビアンカが現われ、ビアンカが1週間ぶりねと思わせぶりな笑顔を見せていたので、彼は自分が部屋で拾ったハンカチをビアンカに見せた。いずれそれを持ち主に返さなくてはならないから、その前に物を憶えておくために、その模様を描いておいてくれないかと頼んだ。

[第4幕]

しかし、後日ビアンカがキャシオに、ハンカチの模様を写すなんて馬鹿馬鹿しいと断ったので、二人は痴話げんかを始めた。さらに、

イヤーゴは、キャシオとビアンカが会っている場面を別途作り、それをオセロにわざと見せることでオセロをして、キャシオがデズデモナーを思慕していると、誤解させるように演出した。オセロのデズデモナーに対する不義の誤解は完全なものとなっており、オセロは、自分にヴェニスから手紙を持ってきた彼女の親類のロドヴィーコの前で彼女をののしり\*①、そして打ちます。デズデモナーの侍女でイヤーゴの妻エミリアは、不義のことは全くの誤解だとオセロに言い、デズデモナーを慰めた。  
[名セリフ] \*① オセロはデズデモナーに迫ります——「**潔白だと誓え!**

[第5幕]

のろまのロデリーゴはイヤーゴにそそのかされてキャシオを殺そうとしたが逆に殺された。これをエミリアがオセロに知らせるためにオセロの部屋に駆け込んだとき、オセロはデズデモナーに逆上して、寝室で彼女を絞殺した。エミリアは、ことのからくりがわかり、デズデモナーの潔白を弁明するとともに、オセロを非難する。さらに夫イヤーゴを非難したが、イヤーゴは妻を殺して逃亡した。オセロはイヤーゴを信じた自分を悔やむとともに自ら命を絶った。そして、ブラバンシオの弟グラシアーノに向かってつぶやく。\*①

\*① **誰が運命に逆らえようか** Who can control his fate ?

→ シェイクスピア悲劇に供する“人間観”

## II 「賢人ナタン」 (レッシング 独) 1779年

岩波文庫 篠田英雄 訳

登場人物

▲サラティン エジプト・シリアのスルタン

アラビアアイユーブ朝の始祖、第3回十字軍(英リチャード1世、仏フィリップ2世、神聖ローマ・フリードリヒ1世赤髭王:途上で死去)を撃退し1192年和議を成立させた。文化振興の政治と寛仁厚情の人格で有名。

▲シター サラティンの妹(▲二人は実在) ——

●メルク 話中に登場するサラティンの弟、リチャードの妹の婿候補

●ナタン エルサレムの商人、賢者、ユダヤ教徒

●レーハ ナタンの養女(実は宮殿騎士の妹ブランダ・フィルネック)——無宗教

●神殿騎士 ロイ・フィルネック (ナタンの語りで、実は騎士はレーハの兄だった、また騎士の父ウォルフ・フィルネックはドイツ人ではない。つまり騎士・レーハはサラティンの甥と姪にあたる。騎士の父はナタンの友人でもある。十字軍の騎士でキリスト教徒。ナタンに会ったときには、まずクルト・フォン・シュタウフェン(母方の姓)と名乗った。

- ダーヤ レーハの侍女———キリスト教徒
- アルハーフィ イスラム托鉢修道士でサラディンの金庫番を務める。
- 修士 キリスト教修道院の修士

アラビアのスルタン、サラディンは1187年エルサレム北方30<sup>キロ</sup>、170<sup>キロ</sup>のシドン、ティルスで第3回十字軍と戦い、その後1192年に双方間で和議が協定された。十字軍側のうちに”神殿騎士”という騎士がおり、彼はサラディンに負けて捕虜となったが助命されていた。それは神殿騎士が二十年前に亡くなったサラディンの弟(アサト)によく似ていたかららしい。とにかく当地を自由に行き来することも保証されていた。一方、賢者として名高い、地元の裕福なユダヤ商人ナタンは、商用からエルサレムに帰ってきたが、その不在中にその家が火事があった。その養女レーハは、運よく十字軍の”神殿騎士”と呼ばれる人物に助けられた。

サラディンは在レバノンの父の財政難を救うことに腐心していたのだが自分も十分に持ち合わせがない。地域統治の費用も要る。そこで金庫番のアルハーフィに金を調達するよう命じた。アルハーフィはナタンの所へ行こうとするが、同時にスルタンに、ナタンはとても狡猾な人物だと付言した。

ナタンは、娘レーハを火事から救出してくれた神殿騎士にお礼を言上しにやってきた。神殿騎士は、お礼はマントの修繕費だけで結構と応えて、双方は和やかに語りあった。そして宗教的立場の違いはあるが、「自分の神こそ世界最上の神だ」とする偏狭な考え捨て、互いに友情を誓い合った。そのナタンのところへ、ダーヤが、突然サラディンの使いが来てスルタンがお召しとのことを伝えていったと報告した。ナタンはひとまず神殿騎士と別れたが、彼が名乗ったクルト・フォン・シュタウフェンという名前に、曰くあげな”縁”を連想した。そこへ、アルハーフィがやってきて、ナタンにサラディンがナタンから戦費を貸して欲しいと伝える。しかし、このとき、サラディンは人の財産を食い尽くす人物だから、この要求には気を付けるようにとの忠告もした。ともあれナタンはお召しにしたがいサラディンのもとへ参上し、「お役に立ちたい」と言上した。サラディンは、「ではどういう形で？」と問うた。ナタンは「自分の持ち物のうち一番上等の品を一番安い値段で譲りましょう」と申し出た。サラディンは、「私が聞きたいのは、そういうことではなく、お前のユダヤ教とわしのイスラム教と、当地へやってきている教の3つのうち、真実の宗教は一つしかないはずだ。どれが真実の宗教か、お前の考えを訊きたい」というものだった。

そこで、ナタンはこれに応じて3つの指輪の話をした——「父親が持つ1つの指輪を3人の息子に譲るにあたり、父親は迷ったあげく2つの偽物を作り、彼らに与えた。父の死後裁判で争った息子らに対し、判長は『どれが本物かではなく、本物に相応しい人物になっているかどうかだ』と諭した。→サラディンはこの答えに感銘を受けた。そして友達

になろうとナタンに言った。ナタンは「お金が御入用では？」と尋ねてみたが、サラディンは「実はその意思もあったが——」と正直に答えた。そこで気を利かしたナタンは、「今自分は借財をもっているがそれ以外なら協力はできる」と話した。すると、サラディンは、借財とは？と尋ねたので、ナタンは「神殿騎士が娘の命を救ってくれた。そしてこの騎士はあなたから助命された。すなわちそれを私は享けている」と答えた。サラディンはその騎士に再会したくなった。

神殿騎士はナタン訪問した。ナタンはその会話から、どうやら騎士の父でコンラートという人物は自分の友人のコンラートと同じだと気付いた。騎士はナタンにレーハと結婚させて欲しいと申し込んだが、ナタンは気乗りしない様子だった。騎士はそれは宗教の違いゆえの偏見かと思いきや、そこで彼はそれに納得できず、修士を介して総大司教にまで相談に行ったが、総大司教もナタンの真意を曲解して、「ナタンこそ極悪人だ。洗礼済のキリスト教徒レーハをユダヤ教徒ナタンが自分の都合だけで養育したのは怪しからぬとまで言う始末。騎士はそれにいよいよ嫌気がし、そこでついにサラディンのところに参上した。サラディンは彼の言い分を聞いて、シターの助言を容れレーハを引き取ることにしようと考えた。

一方、ナタンは修士から、昔のいきさつを再確認のために訊いた。実はこの修士が18年前、母親が亡くなった直後のレーハを父からの頼みでガザへ送る途中、戦火※を逃れながらナタンのもとに預けてきた人物(その時は馬丁)だったからだ。そのときレーハの荷物には父が持たせてくれ聖務日課書だけだった。このことはダーヤも知っていた事実だった。ナタンはその「父」の名をヴォルフ・フィルネック、「母」をフォン・シュタウフェンと聞き出した。正しくレーハの両親は、神殿騎士のそれと同じだと確信した。そしてその不運さに涙した(“レーハと騎士は実の妹と兄、結婚は許されない”)。

※この戦闘時に、ナタンの妻と7人の子供はキリスト教徒(十字軍)によって虐殺されていたのだ。

レーハはサラディンとシターの許に引き取られてきた。彼女は自分の父がナタンではないのをダーヤから聞かされ、涙を流していた。その後、騎士もナタンもサラディンのもとに到着した。ナタンは皆に語った。——騎士とレーハが実の兄妹だということ。そして、ナタンからさらに、レーハの父がフィルネック姓ではあってもドイツ人ではなくベルシヤ人だと聞かされると、サラディンの気がかりは一層強くなった。騎士が自分の弟とよく似ているのは以前から気になっていたもので、サラディンはもしやと思い、今レーハが持っている聖務日課書を開けてみた。するとそこに何と弟アサトの筆跡が明瞭に残っていた。つまりレーハはサラディンやシターの姪だったのだ。ということは、騎士も彼らの甥ということだ。騎士は運命の深さに地にひれ伏した。そして皆で抱擁した。

長々と叙述しているが、結局のテーマは、“人は憎しみの連鎖の中に生きていくが、一方で助け合いの連鎖のなかにも生きていく”



### Ⅲ 老水夫行（コールリツヅ 英） 1798年

岩波文庫 斉藤 勇

#### 第1曲（罪の発生）

老水夫が結婚披露宴に招かれた。3人の若者のうちの1人をとどめ、自分の話を聞いて欲しいと申し出ると、客たちは水夫の目の炯々と輝くさまに畏敬を感じ、その話を聞くことにした。——船は順風のうちに船出して赤道を越えて南に進んだ。やがて暴風にあい波浪をかぶり、南極近くまで行った時には冰山を見るまでになった。何の生き物もないと見えた冰山から、雪の霽をついてアホウドリalbatrossが船に近づいてきた。水夫たちはこれを吉兆として喜んだ。鳥たちは餌を期待しているようで、9日間もマストや帆綱に留まった。ところがある水夫（今席の語り部）が戯れに弓でその鳥を射た。

#### 第2曲（罰の到来）

船は北に針路を変えた。しかし鳥はついてこなくなった。これは何か悪いことが起こるのではないかと皆が気にしたが、霧も霽も晴れたので、それでいいでないかと思った。が、いつしか風は止み、船は進まなくなった。太陽は照り付け、水は少なくなり、船員の中には自分の血を吸う者も出はじめた。こういう難儀になったのは水夫が鳥を射たからだと言われ、怨みを抱くようになった。そこで彼らは水夫の首に十字架代わりに鳥の骸を掛けて、彼をにくんだ。

#### 第3曲（幻の中で魂の苦患）

皆は目がかすんで来たが、やがて水天髣髴の彼方に一つの物が見えた。それは段々と大きくなり、やがて白い帆が見えた。皆は大声で叫んだが——考えてみれば、風もないのに白帆の船が近づいてくるのがおかしいのだが——それは結局、幽霊船の形に想えた幻だった。皆は死中にあって生を渴望した。沈黙の夜、下弦の月が船を照らすだけだった。

#### 第4曲（純真の愛による贖罪）

200人以上いた水夫の中から死人がでた。[披露宴の客たちは水夫の語りに恐怖を顔に出した] 水夫にとっては、斃れた死人の目が自分をにらんでいるように思えた、こんな呪いの光景が七日七夜続いた。でも不思議に水夫は死ななかった。船から見やれば、海蛇を思わせるような影があった。それは輝くように見えたり聖者の祝福を思わせたりした。水夫はむしろ聖者を祝福する気持ちになった。するといつの間にか首にかかった鳥の骸は消えていた。

#### 第5曲（悪霊退散 天の助力）

水夫は眠りの中で聖母マリアの夢を見た。そして己が罪を悔いた。起きてみると昨日まで甲板上にころがっていたバケツが、夜のうち雨を得て水で満たされていた。夢かと思ったが、服も湿っていた。やがて擦り

切れてしまっていた帆が少し風にはためいたように感じた。それには星が瞬いて見えた。月が輝いていながら、闇の中、ちぎれ雲のような黒雲が雨を降らせた。船が動き出した。それは天上の精が聖者の形をとって為さしめたものだった。このゆえに、甲板上で死んだはずの船員が再びうめき声をあげだした。[披露宴の客たちは恐ろしく思えてきた] 思うに水夫は夢の中で二つの声を聞いた。一つは人を愛する鳥を愛するように、の声。もう一つは苦難は再びおこるだろうの声。

#### 第6曲（懺悔）

二つの声はこもごも水夫にさまざまな思いを起こさせた。甲板上の船員たちはいまだ朦朧たる気の中であえいでいた。海上の気はようやく晴れつつあった。そして呪いは徐々に消えていった。水夫はもう見えないもので悩まされないようになっていた。船はゆっくりと進んで行った。やがて水夫は母港にもどることができた。まるで天国のさまを地上に現したような瑞光を感じた。水夫は真紅の衣をつけた天使の姿が見えたように思えた。水夫はひたすらに神に感謝をささげた。水先案内人たちがにぎやかに駆け寄ってくる中にひとり森に棲む隠者がいた。彼は聖なる賛歌を謳ってくれた。水夫はこの人物こそが、自分の悔いを聞いてくれた鳥の血を洗い流してくれたのだと確信した。

#### 第7曲（新生）

さきほどまでの瑞光は不思議に今は消えていた。水先案内人が近寄ってきたが、その隠者はまるで“物の怪”のように思えた、隠者は言う「もっと漕げ、もっと漕ぐのだ」と。すると海の底から轟きがおこり、波が逆巻き、船はたちまち沈没してしまった。水夫は水先案内人の船に助けられたが、後に不思議な静寂がもどった。水先案内人が驚愕して地面に倒れ、隠者は天に向かって祈りをささげた。水夫はよろめく隠者に航海中のことを話した。すると心が落ちついてきた、そこで水夫は方々を巡歴・伝道するようになり、今日、この婚礼披露宴にやってきたのだ。水夫は言う「渺茫とした海の上では、神さへそこに居ますと思わないでいられない」そして『人をも鳥をも、はた獣をも、善く愛する人は善く祈る人。大いなる、小さき、なべてのものをいと善く愛するはいと善く祈る人。我等を愛するゆかしき神はすべてを造り且愛すれば。』——水夫はこう言っ去っていった。

#### ○ある感想

人間の都合を優先することの愚かしさ、を自然の驚異の中で人間に気づかせようとしている。水夫の精神の発展を、罪の発生→罰の到来→贖罪→懺悔→新生というプロセスを気づかせるには、構えて「浪漫的」になってしまうのかな。

#### Ⅳ 菅原伝授手習鑑 (竹田出雲ほか 延享3年 1746)

平安時代、醍醐天皇の御代、渤海国から天皇の絵姿を求めて使者が来る。病に伏せる帝に替わって時平(しへい)がモデルに「なろうかと名乗り出るが、それ菅原道真(丞相)が諫めた。帝から筆道の奥義伝授の勅命を受けた丞相は、かつて不始末ゆえに退けた**武部源蔵**を再び選び、日々これを伝授していた。そこへ、そこへ内裏から急な報せがはいった、それは「左遷」との報せだった。これは、時平が、丞相の養女の**苅屋姫**(実母は覚寿尼)が帝の弟の**齋世親王**(ときよしんのう)と恋仲※なのを利用して、「道真に謀反の心あり」と帝に吹き込んだがための結果だった。そのため道真は遠く九州・太宰府に左遷されることになった(**丞相と苅屋姫の生別れ**)。

※ 二人の密会を桜丸が取り持つ。

左遷の途中、丞相は摂津の安井浜で汐を待つ間、許されて道真は土師の里の伯母、覚寿に会った。その地で丞相は姫の姉立田の夫(宿禰太郎)から命を狙われるが、寸前、丞相の木像が身代わりになってくれた。丞相に仕える白太夫(四郎九郎とも)の一家が久しぶりに一家揃って祝いをする事になりになった。三人の息子**松王丸**(丞相に仕え)、**梅王丸**(時平に仕え)、**桜丸**(齋世親王に仕え)の女房、千代、春、八重も祝いに来るようになっていましたが、白太夫が外出したときに、松王丸と梅王丸が日ごろの遺恨から喧嘩になった。その後ようやく奥から桜丸が姿をあらわれ、丞相配流の遠因をつくった責任から死んでおわびをするという切腹した(**白太夫と桜丸の死別れ**)。大宰府の丞相は夢(安楽寺の飛梅の奇瑞)の中で、時平の陰謀を知り、怒って雷神となって都へ飛んで帰った。丞相、梅王、桜丸のそれぞれの女房たちは時平方から襲われたが、何とかそれを逃れることはできた。

##### 【寺子屋】

寺子屋を営んでいる武部源蔵、戸浪のところへ、時平から丞相の息子菅秀才の首を差し出せとの命令がた。この経緯を知った松王丸は、その後の事態の行方を覚悟して、松王丸自身の子、小太郎をこの源蔵の寺子屋に入門させた。さて源蔵はこの命令をいかにすべきかを思案し、結局今朝入門した小太郎の首を、偽って差し出しました。※ (**松王丸と小太郎の首別れ**)

※ 源蔵、「せまじきものは宮仕えじゃなあ」

この首実検役を、父親の松王丸がおおせつかったが、松王丸は、首桶の中をみて、驚き悲しみの極みながら、「確かに菅秀才の首」と言った。ところで小太郎の母親千代が寺子屋へ息子を迎えに来た。源蔵らはこうなったら母親も殺すしかないと思いついた。しかし源蔵が斬りか

かると千代はすばやく身をかわし、「菅秀才のお身替わり、お役に立ててくださったか」と達観したように言う。松王丸は「**女房喜べ、せがれはお役に立ったぞ**」と言います。「**にっこり笑って死んだ**」と母親に聞かせました。けなげに死んだ子を思い、涙にくれる松王丸と千代、源蔵と戸浪だった。天は俄かに嵐となり雷神がとどろきだし、時平は天罰をうけました。秀才は菅家をつぐことになった。

##### 《菅原伝授手習鑑》

松王丸

└──小太郎 (⇔菅秀才)

千代

##### 《一谷嫩軍記》

熊谷次郎直実

└──小次郎 (⇔平敦盛)

相模

#### V 月曜物語 (A・ドーデー 仏 1871~73)

岩波文庫 桜田 佐 訳

##### 【最後の授業】

あまり勉強が好きでない、アルザスの一少年フランツは、遅刻になるまいと学校に急いだ。途中プロシア兵の訓練にあい、役場の前ではいつもと違う人だかりがし、鍛冶屋の前ではシュテルに大いにかかわれた。フランツはぎりぎりで教室に入って着席すると、後ろにはいつもはいない村の大人たちが来ている。オゼールじいさんは、初等読本を持っている。やがてアムル先生の授業が始まった。分詞法の規則のことで当てられるんじゃないかと内心びくびくのフランツは、案の定当てられ、そして何も答えられなかった。いつもなら定規でぶたれるところが、今日のアムル先生は違った。そして先生は話した。「――私たちは毎日考えます。な一に、暇は充分ある、明日勉強しようって。そしてそのあげくがどうなったかお分かりでしょう。ああ、いつも勉強を翌日に延ばすのがアルザスの不幸でした。いま、あのドイツ人たちにこう言われたって仕方がありません。どうしたんだ、君たちはフランス人だと言いはっていた。それなのに、自分の言葉を話すことも書くこともできないのか！この点で、フランツ君がいちばん悪いというわけではない。私たちはみんな大いに非難されなければならないのです。」フランツは今日がフランス語での授業として最後の日だとやっとわかった。先生は、『**ある民族がどれいとなっても、その国語を保っているかぎりはそのろう獄のかぎを握っているようなものだから、私たちのあいだでフランス語をよく守って決してわすれてはならない**』 同 p15 ことを話した。さらに、きょうのけいこのことを話した。フランツにはいつになくよくわかった。それから歴史や歌の授業をし、そして最後に習字の授業になった。先生は



手本を書いた。「フランス、アルザス、フランス、アルザス」 同 p15 突然教会の鐘が正午を知らせた。40年来の教師生活が今日でおわるアル先生は感慨を込めて板に向かった。そして今一度大きな字で書いた「フランスばんざい！」そして壁に頭を押し付けたまま、動かなくなった。「もうおしまいだ。——お帰り。」

### 【ベルリン攻囲】

普仏戦争(1870～71)後、私とV医師とはパリ・シャンゼリゼ通りを歩きながら弾痕著しい壁や破壊された歩道を見つめていた。エトワール広場に出る手前で医師V氏は、立ち止まって凱旋門近くの大きい角の家の一つ、バルコンの上に閉まった4つの窓のある部屋を指さして独り語り出した。思いつくことがあったようだ。——戦争の始まったころ、医師はその家に住む患者で、ジューブ元大佐という、ナポレオンの第一帝政期に胸甲騎兵で名を馳せた名誉と愛国心の人物を診ていた。彼の病気は急性卒中症だったのだが、彼は戦端が開かれた頃からこのバルコンから、やがてあるだろうフランス軍の凱旋式を見るためにこの部屋に住んでいたのだ。しかし、**ウィッセンブルグの戦い(1870年8月4日 アルザス北部)**での**仏軍敗北**の報にショックを受け倒れてしまった。その孫娘が看病するが、やがて起こったライスホーヘンの戦いで。彼は勝利を信じていたが、これも結果は、仏軍マクマホン将軍(のち大統領)の敗北だった。孫娘は病床の祖父に“**仏軍勝利**”と報告した。そして次々と嘘で固めていった。実際は**セダン**の戦いで**仏軍が大敗北(1870年9月2日 仏北部)**を喫している、壁の上の地図には、パゼーヌ元帥はベルリンへ進軍、プロウサル将軍はハバリア地方へ、マクマホン将軍はバル海へと、フランス国旗は段々とプロシア領内に入り込んで差し立てられていった。そのたびに元大佐は大いに満足し、戦略を大いに語るのだった。ある日、元大佐は叫んだ、「あと一週間でベルリン攻囲だ」しかし、一週間後、反対にプロシア軍がパリに迫ってきた。砲声殷々と聞こえてくる中、孫娘はフランス軍は凱旋式の練習をしていると冷や汗もの嘘で取り繕った。やがてプロシア軍のパリ入城の日(1871年5月)、元大佐は満身に力を込めてバルコンに出て叫んだ。そして自分の眼を疑った。だが、やがて正気に戻り叫んだ。「武器を取れ！ 武器を取れ！プロシア軍だ。」その様子を入城してくるプロシア軍前衛の騎兵が確かに見た。そしてその時、元大佐は再び倒れた、そして今度は死んでいた。

### 【小まんじゅう】

サン・ルイ島に暮らすホニカル家の主人は、毎週日曜日の正午に、家族みんなで家族の手料理に加えてかならずツェルヌ通りのお菓子屋シュロー

のところの小まんじゅう(プチ・パテ)を食べることにしている。これは25年来の伝統になっていた。シュローもそれを心得ていて、店の小僧にいつもの小まんじゅうを届けにいかせた。リウの花が咲き、さくらんぼうの実が下がり、申し分のない朝だった。遠くで銃声や集合ラッパの音が聞こえてきても、マレー街全体は穏やかな空気が流れていた。出前に出かけた小僧は、途中で、カルナヴァル祭で楽しく行進する12～15歳くらいの少年たちを見かけた。そして自分の仕事をすっかり忘れてそれについていった。注文主の家ではホニカル老人が独りその小まんじゅうの到来を待っていたが、いくら待ってそれは届かなかった。ホニカルは怒りだし、家族も手がつけられないほどになった。やがて彼はじっとしておれず、通りに出た。途中で出会った近所の人、怒りに満ちた彼の表情を心配し、「ヴェルサイユ」に進駐してきたプロシア兵に気をつけるように」と注意してくれたが、もちろん彼にはそれは耳に入らなかった。ルイ・フィリップ橋のところで、コモン黨員たちがバリケードを管理していた。彼らはホニカル老人をスパイではないかと怪しがり、銃尾で押しやった。それからしばらく歩いていくと今度は歩兵隊に捕まってしまった。歩兵隊の尋問に老人は答えようとするが、小まんじゅうがどうしたこうしたと言っても皆に分かってもらえず、結局、他にも勾引される捕虜といっしょに、プロシア軍進駐の本営、ヴェルサイユまで勾引されていった。ヴェルサイユでは、他の捕虜たちが取り乱す中、ひとり静かなこの老人を見て、これは悪党の頭だろうとみなした。ホニカル老人は、ただただ今日の不幸をかえりみただけなのだ。そのとき、例の小僧がベルサイユにやってきて話をつけてくれた。やっとホニカル老人は小まんじゅうを食べることができた。

### 【マレー街の降誕祭の祝宴】

マレー街の炭酸水製造業者マジステ氏は、ロイヤル広場近くの友人のところでもクリスマスの祝宴をしてきたところだ。夜も更け午前2時になってやっと自分の屋敷に戻ってきた。彼の屋敷は広大なものだが、実はこの屋敷は彼がネーモン家という貴族から譲り受けたものだった。今大門の所に立つと、ネーモン家の昔の繁栄を物語る紋章や装飾がたくさん残っている。昼間にこの屋敷をながめると、「帳場」、「倉庫」、「工場入口」といった文字が見えるが、深夜ではそれらは見えない。広場を過ぎていくと暗黒の沈黙の中に、何やらひそひそ声が聞こえてきた。その声はだんだんと大きくなってきた。やがて人の姿がはっきりと現れてきた。マジステ氏はその人に挨拶をしたが何の反応もなく、彼は彼らどうしの間で言葉を交わしている。やがて屋根裏の明かり窓にまで、歡樂と賑わいの火が上がり出した。「おや？ 彼らは火をつ

けようとしている」と思ったが、その火は不思議に熱くなかった。マジステ氏は、今は階下にある倉庫は昔は大きな接待の間で、ここでよく踊りが繰り広げられたのだらうと思った。今ここには家具も窓掛けもない、あるのはただサイフォンを詰めた箱や荷物だけ。窓硝子の後ろには、乾いたリウの木があるだけだった。今ここに集まりにぎやかに語らっている老公爵その他の人々は、シャンパンを見つけてはそれを開け、そして楽しく騒いでいる。しかし、よく見ると、シャンパンはマジステ氏の荷物の中にある炭酸水だった。次に音楽が入った。3人のバイオリン弾きがメニューを弾いている。いたんだ鏡までもが輝きだしていた。しかし、いつの間にか夜が白んできた。バイオリンの音が小さくなっていった。大門の松明の最後の光が、大門を入ってくる運搬車の車輪に差す日の光と絡みあっていた。

### 【少年の裏ぎり】

パリ生まれの15歳にみえないステヌという少年は、病身で青い顔をしている。母は亡くなっており、昔海軍の兵士だった父はいまはタンブル街の公園で番人をしていた。だから町の人にはよく知られていて、口ひげの顔はいつもやさしく人に向けられていた。だが、いまやパリはプロシア兵の支配下であって(普仏戦争で占領されていた)、人の心は荒れ果てていた。だから学校はなく、子どもたちは表を駆け廻っていた。それでも軍隊は、保塁を守る仕事があって、それらが練兵するのをよく見物していた。それら軍隊がよくやる遊びに、ガローシュ遊びというのがあって、それはコルク遊びの一つなのだが、人々までもがそれをまねるのだった。ステヌ少年も、他に用事がなければ、そしてお金があるならば、シャトー・ド・広場でそれに加わっていただろう。ここにある青いスポンをはいたのっぽの少年がいる。彼は5フラン銀貨をけっこうもっており、それをガローシュ遊びにつかっていた。ステヌは彼がその遊びをすることに憧れを抱きつつ、彼といっしょに居るようになった。

彼は、ステヌの前で、もっと多くのお金を見せびらかし、「プロシア人のところに行って、新聞を売ると30フランになる」と話した。それを聞いたステヌは怒りをおぼえ、3日間彼から離れたが、その間に夢の中で、彼は枕の下にコルクが山と積まれ、5フランの銀貨がピカピカ光って、床の上に列を作るのを見た。4日目には、ステヌはのっぽに誘われてシャトー・ド・に誘われていった。彼はプロシア駐留兵の前で、自分の家の悲惨な状況を”作り話”を披露し、それが理由で新聞売りの仕事をしてるのだと喋るのだった。ステヌはそんな彼の物腰や喋りようが嫌で、自分は沈黙を決め込んだ。ステヌは、『ぬれたぼろ着を並べた寂しいパレード、煙も吐かない、ひびの入った、霧を破って空にそびえている高い煙突をながめていた。』 同 p33 こんな地域をうちすぎて、今度はフランス側義勇兵が番兵として立つところ

にきた時は、あのプロシア兵の場合のようなお涙頂戴式の話は通用せず、通り抜けに難をきたした。そこへちょうど番人小屋から、ステヌの親父のような風貌の軍曹が現れてきて、『今夜は戦争があるぜ——プロシア軍の暗号を手に入れたんだ——今度こそ、やつらから取り返すぞ、あのいまいまいブルジェ！』 またある時は、あのプロシア兵の場合のようなお涙頂戴式の、といきまいた。これでひと騒ぎとなって、これを機会に子どもたちは姿を消した。彼とステヌも逃走をしたが、そのとき敵の銃を構える音もしたようだ。しばらく走ったのち、塹壕に飛び下りた。もちろんプロシア兵がいた。そこから上がってすぐ近くに園丁の家、そこをプロシア兵がそれを酒場替わりにしていた。ここで彼とステヌと彼らについてきた子どもらはまずは新聞を売り、のっぽの彼はまるでポード・ヒリアンよろしく振る舞い兵を笑わせた。気おくれしたステヌはポーツと突っ立っていた。傍にいた物静かなプロシア兵が、彼ら二人のことを、「自分の息子にこんな真似はさせない」と皮肉って去っていった。他の兵士らは、フランス兵を茶化して哄笑していた。のっぽの彼はここで得た銀貨をポケットの中で鳴らしていた。ほかの子どもらは、途中でプロシア兵からもらったジャガイモを抱え、フランス義勇軍の塹壕までもどることができた。

そこにあの軍曹がいた。軍曹は、彼らと子どもらの行動のことを知ってかどうかわからないが、子どもを見て、満足そうな笑みを向けていた。こどもらは、この”戦利品”を以ってガローシュ遊びをするのだ。

ステヌ少年は、こののっぽの青年と別れてから、急に、自分の行動に、心臓が締めつけられるような思いがした。『パリは、もはや前と同じパリには見えなかった。通行の人たちは、彼がどこから来たか知っているかのように、厳しくながめた。裏ぎりという言葉、車輪の音の中とか、運河に沿って練習している鼓手の太鼓の音の中に聞いた。』 同 p38 ステヌはようやく家に着いた。そして父親がまだ帰っていないことにほっとした。

その晩おそく父親が帰ってきた。何かいいことがあったようで、食事のときに、自分の戦さ経験を思い出しながらステヌに、「お前が大きかったら、プロシア人をやつつけにいくんだがなあ」と。ステヌは真っ青になって寝床に入った。その夜、フランス側の青年遊動隊が発発準備をしていた。ステヌは呵責に堪えられず、父親に昨日の金のことを話した。親父は、息子から話を聞いて、両手で顔を隠して泣き出した。親父は、鉄砲と弾薬入れとを壁からはずし、銀貨をポケットに入れた。『よし、おれはこれを返してくる。』そして、一言もつけ加えず、振り向きもさえないで、階段を下り、夜陰に乗じて出発して行く青年遊動隊に加わった。それ以来彼の姿を再び見ることはできなかった。』 同 p40



## VI 「十三夜」 樋口一葉 明治28年

岩波文庫

- 原田 勇 奏任官でお関の夫
- 太郎 勇とお関の息子
- 原田(お)関 原田勇の妻 斎藤夫婦の娘
- 斎藤主計とその妻 斎藤はいわゆる没落士族
- 斎藤亥之助 お関の弟
- 高坂録之助 お関の幼馴染で今は車夫

お関は役人(奏任官)、原田勇の妻で何不自由なく暮らしている。だが、子ども太郎ができてからは、夫から疎んじられていた。夫は妻に、使用人の前で聞こえよがしに小言を言ったり、突慳貪なもの言いをしたりした。また、同僚らの内儀は華族女学校を出ていると、そんな学校を出ていないお関の前で嫌味を交えて言うこともあった。そのくせ、お関に離縁を明言しない。なんとも生煮えのような心理的隔たりをこの夫は作り上げていた。お関はそんな仕打ちに辛抱してきたが、いよいよそれにも我慢ができなくなり、ついに今夜(十三夜)、太郎を残したまま原田の家を飛び出し、実家へ戻ってきた。お関の両親は、娘の不意の帰宅に驚いた。お関は座敷に上がりはしたものの、さて何から切り出そうかと迷ったが、その前に親の方から、勇殿は息災でいるか?、太郎はどんな様子だ?、亥之助は夜学に通いながら仕事をもっているが、上司の課長さんにかわいがられて、先日も昇給することができた。これも勇殿のお蔭だと喜んで、といったことどもを並べ立てた、お関は、いよいよ言いにくかったが、ありていに今の結婚生活の辛さについて語り、そこで今夜帰ってきたものだと話した。両親はさすがに驚いたが、なんとも二の句がつけなかった。母親はしみじみと聞いたのち、それはお関がおとなしすぎたので勇殿が図に乗っているのだ、お関の言い分がもともとも味方してくれたが、父親は困り顔で、自分らが没落士族であることの引け目もあって、そうは言っても離縁された後の女とすれば、『大丸鬚に金輪の根を巻きて黒縮緬の羽織何の惜しげもなく、我が娘ながらおつしか調ふ奥様風、これをば、結び髪に結ひかへさせて綿銘仙の半天に 襷がけの水仕事さする事いかにしてしのばるべき、太郎といふ子もあるものなり、一端の怒りに百年の運を取はずして、人には笑はれものとなり、——』と 危惧するばかりだった。さらに父親は、勇殿は外では上級役人としての気苦勞もあって、その憂さを免れたい気持ちから、内でお前に辛く当たるのだろうが、それは世間でよくあること。よそのご内儀で、一見幸せそうに見えていても内実はきつとどこも同じだろう、と諭した。するとお関は父の説諭に折れた。確かに離縁しては太郎に再び会うこともできなくなる。それは父親の最も危惧するところだった。

お関は、無念を押し殺してここは一番辛抱しましょう、もうこんなご心配はかけませぬと涙を拭って、両親に詫びた。母親は、この娘は何という不幸せ者かと嘆きの声を上げた。亥之助が裏の土手から積んで花瓶にさしていた薄の穂が哀れさをかもしていた。

斎藤の家は、上野の新坂下で駿河台にいたる道だったので、森がちになっており、木の下は闇をこしらえている。勇殿に心配をかけてはならないと早速に親は車を手配してくれた。『さやけき月に風の音添ひて虫の音たえだえに物がなしき——』上野に入って一丁ほど来たところで車夫は突然止まった。そして、「ここでご免こうむります。お代はいりませんから」と言い出した。お関は、それでは困りますとしばらく問答をしたが、月を背にして立つ車夫の顔を見ると、見覚えがあった。お関が記憶を確かめながらその名を問うと、その記憶どおりで、車夫は幼馴染みの、猿楽町の高坂録之助だった。録さんの親父さんの店は小川町にあって、能登屋という煙草屋を営んでいた。録之助が問わず語りにお関に言うには、自分は、十八、九歳の頃から徐々に自暴自棄名生活をするようになり、その後親戚の薦めもあって、筋向いの杉田屋の娘、なかなか器量良しで通っていたが、を嫁にもらい、やがて娘も生まれのだが、その後は“飲む打つ買う”の放蕩三昧。煙草屋は店じまいとなり、おつ母さんは長姉の嫁ぎ先へ引っ込んでしまった。女房と娘は里に戻って音信普通。ただ娘はチヴスで亡くなったとは聞いている。自分は、浅草町の村田という家の二階を寢床にして車夫稼業をしているだけだ。このような自身の墮ち込みの一方で、お関さんの華やかな暮らし向きのことを聞き知っていましたよ、とのことだった。

お関は幼馴染の録之助のことを、十二歳くらいから意識していた、原田と結婚する前までは、自分はその小川町の煙草屋の店で新聞でも読みながら店番をするのだろうかとか半分希望まじりに行く末を考えたこともあった。さて、録之助が今夜、突然、車を引きたくないと投げ出したのは、ただの気まぐれからだった。しかし、そう言ったし、またお客がお関だったと分ったし、そしてこうまで身の上話を交わした後となつては、もはや、二人は、このさびしい夜道を広小路まで歩いて下っていくより他なかった。広小路には灯があった。お関は、紙入れから紙幣いくらか取り出して小菊の紙にしほらしく包みて、『録さんにはまことに失礼なれど、これにて鼻紙など買ってくだされ——』と手渡すと、録之助は『ありがたく頂戴して思ひ出にします』と応えた。二人は広小路で別れた。『大路の柳月のかげに靡いて力なささうの塗り下駄のおと、村田に二階も、原田の奥も憂きはお互ひの世におもふ事多し』

作者は決して時代ゆえの“女の分別”を押し付けてはいない。人の世の不条理をじっと噛みしめ、もがいて生きていかざるをえない現実を、余情の中で表現している。